

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

【氏名】松本 剛

【所属】(助成決定時)南イリノイ大学大学院 人類学科 博士課程

【研究題目】ペルー北海岸における神政国家シカンの宗教信仰の本質 —行動考古学の視点から—

【研究の目的】

本研究の目的は、10世紀頃にペルー北海岸で栄えた神政国家・シカンにおける宗教信仰の本質を考古学的手法によって明らかにすることである。これまで、シカンの宗教信仰の中心には貴族による「神格化された祖先(“シカン神”）」への崇拝があったという仮説が立てられてきた。シカンの宗教美術において、シカン神はヒキガエル、海菊貝、ジャガー、蛇、蜂、イグアナ、オウムなどと共に描かれる。これらの生き物はみな、山岳地からの水の到来や新しい農耕サイクルの幕開け、エル・ニーニョ現象による生態系の変化(いずれも主に12月)を象徴するものばかりである。このことから、「水」、「生命の更新」、「農業の成功」といった概念がシカン宗教の重要な要素であり、祖先崇拝信仰との間に何らかの関係があったとも推測されている。

本研究では、2006及び2008年にシカン遺跡において未盗掘のまま発掘された貴族の墓地(中期シカン)と、その直上と周辺にて記録された様々な儀礼活動の痕跡を考察対象とする。発掘では、中期シカンから植民地時代に至るまで、沖積層と密接に関連した、様々な遺構を含む14の焼土層が見つかった。墓地の直上であることから、これらを死者と生者の間の500年以上に渡る永続的な相互関係の物質化、すなわち追悼儀礼の痕跡であると仮定する。誰が、いつ、何を、どのように行ったのか。儀礼活動の本質に迫るには、これらの問いに答えを出さなければならない。本研究では、植物遺物の分析から儀礼活動のコンテキスト(「いつ」、「何を」、「どのように」)を明らかにすることで、その活動の意味を明らかにする。

【研究の内容・方法】

植物遺物の種判別検査からは、炭素年代測定や層位観察では不可能な、人間活動が行われた季節の推定が可能となる。たとえば、居住面で人々によって踏み固められた微細な植物遺物の種判別により、人間活動が行われたのは一年のうちのいつ頃であったかを推定出来る。すなわち、判別された植物種間で繁殖サイクルの一致が見られれば、それは人間活動に季節性があったことの間接的な物的証拠となる。繁殖期が12月下旬以降に集中するようであれば、サンプルを含む土壌の堆積はエル・ニーニョ現象による降雨や洪水によるものである可能性が強まる。一方、澱粉粒分析では、各種遺構における調理土器や銘々皿から採取されたサンプルから澱粉粒が見つければ、その解剖学的特徴から、どのような種をどのように調理して消費したかが分かる。

種判別検査、澱粉粒分析ともにペルー共和国リマ市、カイェターノ・エレディ大学の花粉学・古植物学研究所にて、ルイス・ワマン氏の協力のもとで行われた。分析サンプルの選定は、2011年6月15日からシカン国立博物館にて行われた土器分析と並行して行われた。2006及び2008年の発掘時に各種遺構から採取された下記の土壌サンプルを篩にかけ、保存状態の良好な分析サンプル(種判別検査61点、澱粉粒分析14点)を選定した。

- 1) ワカ・ロロ神殿西側墓地の発掘(2006年): (1) 墓地直上の各居住/焦土面から削り取られた土壌サンプル、(2) 居住面の各種遺構(立坑、炉、竈、燃やされた植物等)から採取された灰・土壌及び植物遺物サンプル

- 2) 神殿に隣接する「大広場」の発掘(2008年): (1) 調理用と考えられる3メートル四方の囲炉裏の内部及び周囲から採取された灰及び植物遺物サンプル、(2) 調理器や共用/銘々器内部から採取された土壌サンプル、(3) 神殿群と干上がった川を結ぶ、通常の用水路とは流れが真逆の儀礼用用水路の底面から採取された土壌サンプル

#### 【結論・考察】

澱粉粒分析では、全14サンプルのうち11サンプルからトウモロコシの澱粉が独占的に検出され、個々の澱粉粒には調理された形跡(たとえば製粉や加熱)が確認された。トウモロコシ以外の澱粉が全く見つからず、調理された痕跡があることから、チチャ(トウモロコシのビール)の醸造、貯蔵、および/もしくは消費が行われていたことが推測される(サンプルが採取された土器片からは元の器形が分からないため、醸造・貯蔵・消費の区別は不可能)。特に儀礼用用水路内から採取された土壌サンプルからは多量のトウモロコシ澱粉が検出された。インカ時代に祖先供養の一環として、死者の世界に繋がっていると考えられた大広場の用水路にチチャを注ぐ儀礼が行われたが、同様の儀礼がシカン時代にも行われていた可能性が強まった。

シカン時代以降も、大きな洪水が起こるたびに神殿周辺でアルガロボの落葉落枝を燃やす儀礼を行った。14の居住/焦土面のひとつからは煙草も見つかった。アンデスの東側の地域では、祖先供養の儀礼に煙草の煙が使用されることが民族学者によって報告されている。土壌サンプル内に見つかった種子や果実、花粉遺物の種判別検査により、2月から7月にかけて、特に7月に繁殖期を迎える種が多いことが分かった。これによって、考察対象である儀礼活動には緩やかな季節性があったと主張できるかもしれない。しかし、一年生種以外に繁殖期が12月後半にかかるものはほとんどなかったため、儀礼活動が行われたのは、山岳地から水が到来する時期ではなく、その水量がもっとも多くなる時期もしくはその直後であったと考えるべきであろう。人々は生命の源である水をもたらしてくれた祖先へ感謝を示すために、煙草の煙を用いたり、居住面を燃やすなどして祖先を召喚し、供物を捧げたのかもしれない。